

Weekly Market Report

Dec 07, 2020

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

リスクオンのドル売りは継続か。今週はECB理事会に注目

USD/JPY (1週間の値動き)



(出所) Bloomberg

コメント

先週の為替相場はドル売りの流れ継続。開発中の新型コロナワクチンが年内に導入されるとの観測から、マーケットはリスクオンの地合を継続。週末の米雇用統計は市場予想より弱い内容となったものの、追加経済対策への期待が高まったことから、米株3指数は最高値を更新。10年米金利は0.9%台後半へ上昇。為替相場はリスクオンのドル売り圧力が強く、ユーロドルは節目の1.20を上抜けし、一時1.21台後半へ上昇。ポンドドルも一時1.35近辺まで上昇。ドルインデックスは90台へ下落。ドル円は両通貨とも売り優勢の地合となり、方向感の出にくい状況。今週はECB理事会が予定されており、追加緩和実施はすでに織り込み済み。市場ではラガルド総裁からユーロ高牽制の発言があるかどうか注目。牽制発言あれば一時的な調整はあり得るものの、リスクオンのドル売り圧力は強く、ユーロドルは1.25を目指す展開を予想する。

(市場営業部/浅川)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
12/8(火)	(ドイツ) ZEW景気期待指数	35
12/10(木)	(欧州) ECB理事会	-
12/10(木)	(米国) CPI	+1.5%
12/11(金)	(米国) PPI	+0.2%
12/11(金)	(米国) ミシガン大消費者マインド	76.3

USD/JPY (5年間)



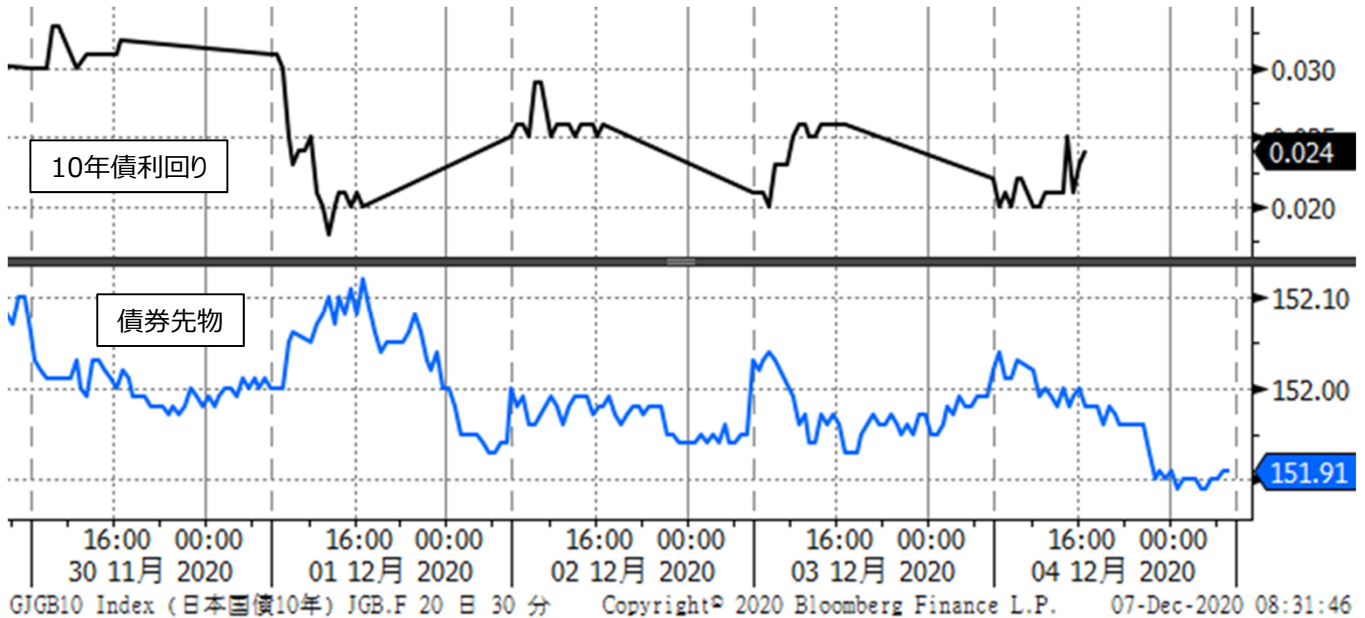
今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
福永純一	103.50 - 105.20	米株価上昇に伴う金利上昇圧力が掛かり、104円を目途に下値堅い展開か。今週はECBラガルド総裁の発言に注目。
山下航平	103.00 - 105.50	各国のワクチン承認報道等を支えにリスクオン地合い継続か。FRB追加緩和の判断材料となる米CPIの動向に注目。

2. 円金利相場概況

国内感染再拡大や国債増発懸念から、米金利上昇に伴う円金利上昇圧力も限定的か

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



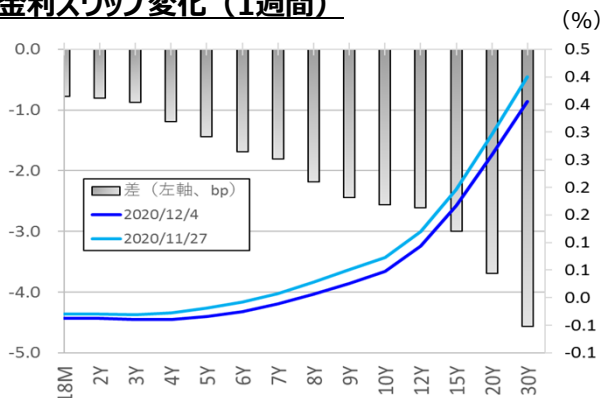
(出所) Bloomberg

コメント

先週の債券相場は、国債入札を順調に消化し、幅広い年限で金利は低下した。12月1日（火）の10年債入札は、第三次補正予算に伴う国債増発検討に該当しない年限で、目づプラス利回り確保による国内勢からの需要もあり、10年債利回りは低下した。3日（木）の30年債入札も0.65%水準では、生保等の国内投資家から一定の需要を集め、超長期ゾーンも金利は低下した。

一方で、新型コロナワクチンの年内実用化期待からの米株価上昇に伴い、債券売りが加速。週末発表された米雇用統計の大幅減速した結果も受け、追加経済対策への期待が高まり、米10年債利回りは再び1%近辺まで上昇している。今週は米金利上昇の流れを引き継ぎ、円金利にも上昇圧力が掛かる中、国内は10日（木）の20年債入札を控え、節目の0.40%水準まで上昇余地有り。但し、引き続き国内感染再拡大や第三次補正予算に伴う国債増発懸念が燃っており、金利上昇圧力は限定的か。（市場営業部/福永）

金利スワップ変化（1週間）



5年円金利スワップ推移（5年間）



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
吉岡博紀	0.03% - 0.05%	国債増発懸念で円金利上昇圧力が強まる局面ありそうだが、需給や日銀オペに下支えされ一過性の動きに留まる見通し。
小野口裕美子	0.02% - 0.05%	足元の景気の悲観的な見方と先行きの楽観論が交錯して方向感の出づらいつながり相場つきが継続。

3. 今週のトピックス

当面の豪ドル相場見通し

新型コロナウイルス感染の抑制と中国の需要回復が豪ドル相場を後押し

<当面の豪ドル相場見通し>

当面の豪ドル相場については、米国の強い金融緩和姿勢を受けたドル売りトレンドが続く中、中国景気の回復期待もあり、堅調に推移すると予想する。新型コロナウイルスについても、オーストラリアでは厳格なロックダウンが奏功したことに加え、これから夏に向かう南半球は欧米と比べて感染拡大が抑えられる見通しであることも相場の後押し要因となる。ただし、オーストラリア中銀（RBA）の金融緩和姿勢の強まりは上値抑制要因となってくる。チャート的には2011年高値1.1081と2020年安値0.5510の38.2%戻しとなる0.7638が目先のターゲット。下値のサポート水準は0.7000（図表1）。豪ドル円については75.00円-79.00円のレンジ推移を予想。

<オーストラリアの経済状況と金融政策>

オーストラリアの経済状況については、2020年7-9月の実質GDP成長率が個人消費の回復を受けて前期比+3.3%となったものの、2020年の成長率見通しは▲4.0%程度と予想され、新型コロナウイルスの感染拡大前の水準を回復するには2022年までかかるとみられる。

金融政策については緩和的なスタンスが継続されており、11/3に行われたRBAの政策会合においては政策金利と3年国債金利の誘導目標が0.25%から0.10%に引き下げられたほか、6か月間で1000億豪ドルの債券買入れを行うといった追加緩和が実施された。12/1の会合で政策変更は行われなかったものの、必要であれば追加緩和を行うとのハト的なスタンスは維持されている。RBAはマイナス金利の導入やイールドカーブコントロールの年限延長に否定的な見解を示しているため、今後の緩和手段は債券買入れの拡大が中心になるとみられる。

現在の金融緩和局面は2011年から続いており、10年国債金利も5.00%台から1.00%程度まで下落しているが（図表2）、オーストラリア国債の長期金利水準が先進国の中で相対的に高いことも豪ドル相場の下支え要因となってくる。

<中国需要回復への期待>

最大の貿易相手国である中国の需要回復はオーストラリア経済を支える好材料。オーストラリアは世界一の鉄鉱石産出国でその大半を中国へ輸出しているが、鉄鉱石価格は中国需要の回復やブラジル鉱山の操業停止を受けて上昇基調にあり、それに合わせる形で豪ドル相場も上昇している（図表3）。中国がオーストラリア産の石炭や大麦の輸入を制限するなど、豪中関係は良好とはいえないものの、中国が新型コロナウイルスの感染拡大による景気の悪化からいち早く回復してきていることは、資源需要の強まりを通じて豪ドル相場の大きな買い材料といえる。

（チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我）

【図表1】豪ドル相場の推移（2008年-2020年）



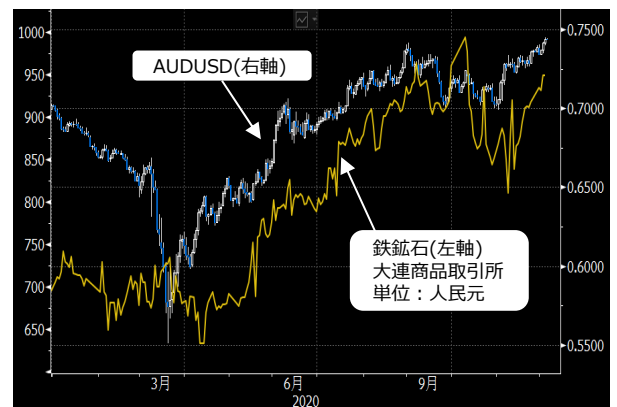
（出所:Bloomberg）

【図表2】オーストラリアの政策金利と10年国債金利



（出所:Bloomberg）

【図表3】2020年の豪ドルと鉄鉱石相場



（出所:Bloomberg）

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会